

あとがき

ディケンズの作品は時間と空間、言語と文化を超え、二百年後の今でも世界中で多くの読者を魅了し続けている。大学や学会では以前にも増してディケンズ研究が盛んであり、彼の生涯と作品についての論文や研究書は汗牛充棟もただならない。また、演劇、映画、テレビドラマでも相変わらず頻繁に脚色され、一般大衆を楽しませている。このように衰えを知らぬディケンズ人気を考えるならば、彼の生誕二百年を祝う二〇一二年に、母国イギリスだけでなく海外でも様々な記念事業が企画されたのは当然のことかもしれない。

BBCは記念番組(Dickens on the BBC)として去年のクリスマスにサラ・フェルプス脚色の『大いなる遺産』、新年にグウィネス・ヒューズ脚色の『エドウィン・ドルードの謎』の新作ドラマを連続放映した。演劇関係では、十八歳で俳優を志したディケンズに敬意を払うかのように、大英帝国勲章を受けたミリアム・マーゴリーズがギャンプ夫人やミス・ハヴィシャムをはじめとする二十人以上もの女性キャラクターを独りで演じ、ワールド・ツアーを行っている。また、世界を代表する演劇制作者キャメロン・マッキントッシュは、ディケンズの誕生日から一年間、ライオネル・バート制作のミュージカル『オリバー!』を英国ツアーで上演している。

ディケンズの二百回目の誕生日には、ウェストミンスター大

寺院で記念式典が行われ、彼が埋葬されている南翼廊(ポエツ・コーナー)に多くの子孫や関係者が集まった。ジョン・ホール首席司祭による冒頭の挨拶は、「二百年前の今日この日、英語の作品を著した最も偉大な作家の一人が誕生しました。チャールズ・ディケンズの情熱と憐れみの心は彼の時代においても強い影響力を有していました。今もその著作物を通して世界中の読者を感動させ、影響を与え続けています。私たちがディケンズの子孫と崇拜者が大勢、今日この墓前に集まっています。それは彼の生涯と業績を偲んで称えるため、彼の著作や例にならって心を豊かにするため、全能の神に感謝して祈るとともに彼のことを忘れずに敬うためです」というものであった。そして、御臨席のチャールズ皇太子がフィナーレを飾ってディケンズの墓に花輪を供えられた。

生誕二百年を記念する展示会としては、昨年末から半年間にわたって、ロンドン博物館が「ディケンズとロンドン」という題目でヴィクトリア朝当時の首都の雰囲気再現した。その跡を継ぐかのように、六月からは「ディケンズと芸術家たち」というテーマで、ギルドホールにあるウオッツ・ギャラリーが当時の画家たちとの交友や影響を受けた画家たちに光を当てている。また、誕生日前から一月初旬まで、ディケンズの生誕地ポーツマスのシテイ・ミュージアムでは、彼が生きた時代のポーツマスの生活を「一都物語」と称して展示している。

学術の世界でも記念事業が目白押しである。一九〇二年設立の「ディケンズ・フェロウシップ」は今年国際学会の開催地

としてポーツマス大学を選び、「ディケンズのインパクト」というテーマで八月九日から一四日まで生誕二百年祭を祝った。日本支部の会員では、佐々木徹支部長が「靴墨工場のインパクト」という演題で、今林修氏と西尾美由紀氏が「ヘディケンズ・レキシコン」プロジェクトと山本忠雄博士」と題して、それぞれ発表された。ディケンズ研究者にとって一番ありがたい記念事業は、バッキンガム大学のジョン・ドリュー氏を中心とするチームによって二〇〇六年五月に始められた週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』と『オール・ザ・イヤ・ラウンド』の完全な（つまり、電子テキストとして読めるだけでなく検索も可能な）オンライン版が今年の三月に完成し、無料で公開されたことではあるまいか。この一大事業 (Dickens Journals Online <<http://www.djo.org.uk>>) が今後のディケンズ研究に大きく寄与することは間違いない。また、百年以上もの伝統を持つ学術誌『ディケンズジアン』が二〇〇〇年まですべて電子化され、オンライン版 (ProQuest) として利用可能になったことも喜ばしい。

日本では、田辺洋子氏が生誕二百年を前にディケンズの一五もの長篇小説の個人訳という金字塔を打ち立てられ、今年も『クリスマス・ストーリーーズ』と『クリスマス・ブックス』(溪水社) の翻訳を上梓された。翻訳は日本でディケンズのアマチュアを増やすのに欠かせない重要な仕事である。ディケンズ生誕二百年祭実行委員会が誕生日以降に東京地区で催している十回の連続朗読公演もまたディケンズ愛好者を増やすのに貢献して

いる。六月一六日には早稲田大学で日本支部の春季大会が開催されたが、そこでは佐々木支部長が招聘されたカリフォルニア大学バークレー校のキャサリン・ギャラガー教授による『二都物語』——復讐としての歴史」という記念講演が支部会員たちを魅了した。天理大学で開催される秋季総会では松村昌家氏、西條隆雄氏、植木研介氏による生誕二百年記念の鼎談「私のディケンズ——一九七〇年以降のディケンズ再評価の流れの中で」が予定されている。また、ディケンズの暴力問題を扱った本書とは別に、日本支部では前支部長の原英一氏を中心に、会員一三名による英語の記念論文集 (*Dickens in Japan: Bicentenary Essays*) が編集され、松柏社から出版される予定である。これまで日本支部は大学教員を中心に構成され、様々な活動を行ってきたが、最近是在野の研究者や愛好者の会員が増えており、文学受難と少子高齢化の時代にもかかわらず、ゆつくりと着実な発展を遂げている。この喜ばしい発展が半永久的に続いてほしいと願うばかりである。

末尾になって恐縮だが、このような論文集に関心を寄せていただき、企画当初から暖かい配慮と懇切な助言をいただいた大阪教育図書社の横山哲彌社長に対し、この場を借りて衷心より御礼を申し上げたい。今回は出版費節約のために、編者がDTPのレイアウト・ソフト (Adobe InDesign) を使用し、見よう見まねで版下を作成した。サンプルとして序章の版下を年始めに提出し、横山社長から(最低レベルであろうが) 合格通知をもらった時は、正直、序章を書き終えた時よりも嬉しかった。

とはいえ、所詮は素人の組版であり、レイアウトで読者の心を打つことはないだろうし、もとより多少のミスは覚悟の上である。執筆者の皆さんには何度も推敲してもらい、版下もチェックしていただいたが、表記の統一など、時間の関係で編者が断りもなく修正した箇所が少なくない。従って、それも含めて、レイアウト上の崩れ、誤字・脱字の見落とし、その他の不備が残っているならば、すべて編者の責任である。ただし、そうした編集上の不備がある代わりに、各章を担当した中堅・若手の研究者による論考は、本人の一番好きな作品か、最近エネルギーを注いでいる作品について書かれたものであり、いずれもプロの仕事だと言ってよい。もちろん各論考については首肯しかねる部分も異を唱えたい箇所もあるだろう。その場合は、それぞれの執筆者にメール等で忌憚のない御意見をお寄せいただければ幸いである。

編者

二〇二二年九月一五日